

## 子どもの自己実現と保育者の自己実現

津 守 真

三歳のK男は、朝、門から庭にはいるとすぐに、目の前にあった大きなれんがを両手で持ち上げ、真直にホールに向かって二十メートルほど歩いて、れんがを溝の中に投げこんだ。三歳の子どもの力には余るほどの重い物を両手で運んで歩いたことに私は驚いた。れんがを溝の中に入れるとK男は再び門まで引き返し、もう一個のれんがを同様にして運んできた。

これは登園してすぐのことで、K男は学校に来たら何かを力を出してやろうと思ってきたに違いない。そして最初に目についた物に

挑戦した。

重い物を持ち上げて歩く感覚を思い出してみると、そのとき人は一点に自己の精神を集中させている。この感覚は、人間にとって重要である。気持が散漫なときにはできない。

この身体感覚は、大人が仕事をするときの精神の集中力と似ている。大人は、自己の世界の諸条件がととのって、うまくはたらか合うようになったときに、力を出して仕事をするができる。大人の仕事には、いろいろの報酬や評価が伴うが、力を出した感覚が得られないと、その仕事はむなしさを感じさせるのではないだろうか。労働はそれ自体がよろこびである。そう考えると、子どもが重い物を持ち上げて歩くというのは、たとえそれが何の役にも立たないように見えても、大人の仕事の原型である。

朝、門をはいってきたときに、直ちに目にとまった物を両手で持ち上げた子どもにとって、外界の物は、彼の自己実現に挑戦するものとしてあらわれている。内的生命力を育まれてくる子どもにとって、外界は、自分が何事かをなしてゆくものとして輝やいて見えるであろう。

環境や教材をそろえておくことは、たいせつである。しかし、保  
育者にとってそれ以上にたいせつなのは、子どもの内的生命力を育  
てることである。そうすれば、どんなところにも子どもは興味を発  
見するし、それがなければ、どんなに教材や活動が豊富に準備され  
ても、それらは子どもの自己実現の活動の中に組みこまれない。

力を出して何事かをする体験が、人間の底辺にある自己実現の要  
求を形成するのであると思う。

幼児初期の自己実現の体験は、生涯を通しての人間形成の基礎で  
ある。しかし、成人後の社会的仕事は、個人の自己実現の断念とす  
ら見えることがある。社会的仕事は、個人の野心の道具ではないか  
らである。少し飛躍することになるが、この点について、丁度数日  
前に出版された一冊の書物から考えてみたい。

北川台輔著「一世と二世」のこと\*

この書物の主題は、米国の日系移民の一世と二世についてであ  
り、とくに、第二次世界大戦中に、日系人である故に、それぞれの  
開拓した土地から追われて、強制収容所に集められたそのときの牧

師としての体験である。著者の北川台輔氏は、私が若いとき、米國留学時代に、多くのことを教えられた師である。書物は、米國人に對して、日系人の苦勞とその立場を訴えたものであるが、更にそれを越えてすべての人間をひとしく人間として見るヒューマニズムを基盤として、その人々と生活を共にした体験からの人間理解が述べられている。著者は、すでに、一九七〇年にスイスで客死されたが、実に實質的に、米國と日本との橋渡しをされた。國際人としての日本人である。

このように書くと、故人について記す贅辭のようになってしまふが、実のところ、私はこの書物の翻訳を最近になって読むまでは、戦時中の日系人強制収容所についてほとんど知らなかったし、北川台輔氏が、かくも深くそのことに関与しておられたことも知らなかった。私が知っていた著者は、異國の地で、私が相談ごとがあつて訪ねたときも、たえず忙しく書類を整理しながら、訥々と、ユーモアをまじえて根本をついた考えを示された人である。

米國人もまた、この人の言うことなら本当だと耳を傾ける。そういう人であつた。戦後直後、後の副大統領で民主党のハンフリーがミネアポリス市長のとき、市長の諮問機関である人種問題委員会

で、北川台輔氏は日本人でありながら委員長であった。私が留学当時、米兵と結婚した日本婦人の懇談会を開いたり、都会に憧れて出てきて問題を起しているアメリカインディアンの若者たちの相談にのったり、日系人のみでなく、さまざまな人の世話役であった。聖公会の牧師である氏が、日曜日に、説教壇から、がっしりとした骨組の話をしたときには、本来は学者肌の人であることを思わされた。私共留学生に対しては、人間として互いに信頼できる友人をつくるのが、人種国籍をこえて必要であり、可能であることを、折にふれて教えられた。

今回、翻訳出版された書物を読み、氏がどのような体験から、異人種のかげ橋として生涯を終ることになったのかをはじめて知った。序章に次のように記されている。

「そのような事態のもとで、一人の人間に出来ることは一体何であろうか。その瞬間から、私の人生は私自身のものであることを停止してしまった。なぜなら、私は何百人というこの地域に住む日本人の家族の友として、同時に日本社会と他のアメリカを構成する人種社会との間の調整役としての仕事に投げこまれたからだだった。」

そのような事態とは、一九四一年十二月七日の真珠湾攻撃以来、それまで平和な農村であった日本人社会が、敵国人として困難な事態に直面したことである。日常接している人々の困窮が、ひとりの人の人生の展望を全く変えて、違う人生を生きはじめに至ることを示す好例である。しかもその全体は、人間に対する深い信頼によって貫かれている。そのことは次のように記される。

「私自身については一つのことを言える。この起りつつあったすべての事件にもかかわらず、私はアメリカ人の公明正大さと正義について信念をもっていた。私の心の奥深く、アメリカ人が日本人に苦痛を与えようとたくらんだりはしないという確信があった。」(p. 66)

この自分と友人に対する揺がない信頼が、これから後の異人種間の調整役としての北川台輔氏の仕事の根底をなしている。ここではこれ以上詳しく述べる余裕がないが、この時代に生きた稀有な人の生涯を、この書物に見ることができると。

この書物の著者は、多くの人の証言によると、幼少時に人一倍やんちゃで、いたずら坊主であったという。すなわち、外界に挑戦して自らの力を出し、自己実現する体験を多く積んでいたのだと思

う。そのことが、自分に対する確信と、他者への共感と、他人への信頼の基礎をつくっている。自己放棄とみえることが、真の自己実現への道となっているのを見る。

保育の場合を考えても保育者の仕事は、子どもの要求に応答するのに忙しく、自分の自由が少なく見える仕事である。それだから、保育者はときに苛立つ。けれども根本に立ち返るならば保育者は、子どもの自己実現に力をかすことによつて、自分自身の心の底の要求は何であるかを考え直し、そして、子どもにも自分にも共通の、人間としての真の要求に目をとめることができる。それに応答するのが保育の実践だから、保育者の生活には、広い意味での自己実現のよるこびがあるのだと思う。

\*北川台輔「一世と二世―強制収容所の日々」(伊達安子訳 聖公会出版 東京都新宿区小川町9-5)

(愛育養護学校)

## 幼児の教育 第八十五巻 第八号

八月号 ◎

定価 四〇〇円

昭和六十一年七月二十五日 印刷

昭和六十一年八月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼  
発行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレーベル館にお願いいたします

\*万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。